

夏期フランス語研修報告書

人文社会系 フランス語圏文化論 3年

1715216 鈴木美南

9月1日から28日まで、フランスのリヨンにてフランス語研修に参加した。現地ではリヨンカトリック大学付属の語学学校に通い、1か月を過ごした。ここでは現地での生活や授業について報告したいと思う。

私は、フランスに行くのはもちろん、寮での一人暮らしも初めての体験で、とても緊張した。飛行機の乗り継ぎもしたことがなかったので不安だった。しかし、大きな問題なく無事にフランスに到着し、現地でリヨンを紹介していただいた時の感動はこれから一生忘れることのないくらい大きなものだった。たくさんの、初めて見るものにずっと感激していた。建物がまず違う。川沿いに建つ建物の眺めは本当に美しく、毎日見るのが楽しかった。リヨンには、ユニークな建築物も多くあり、旧市街とはまた違った雰囲気も楽しむことができた。大きな公園もあったので自然も楽しめる。何でもある街、という印象を受けた。フランス語は1年生の時から学んでいて、授業でもフランスのことについて勉強してきていたので、今回の研修では、そんなフランスに自分がいる、ということだけでも感動した。

到着した次の日にクラス分けの筆記テストと口頭テストがあった。クラスには知り合いがまずおらず、周りが全て外国人なので圧倒されてしまい初日は本当に緊張した。人数は20人くらいで、コロンビア人が3分の1くらいを占めていた。他は、メキシコやペルー、トルコ、台湾、韓国、中国、日本という構成だった。意外にも母国語が英語の人がいなかった。授業中は、先生からフランス語だけを話すように言われ、席も隣が母国語の違う学生同士になるように座っていた。そのため、隣の人と一緒にやる課題が出た時にはもちろん、授業の合間にもフランス語で会話する機会が必然的に設けられていたので、母国語の違う人とフランス語を使って話をするのが出来、とても良い環境だったと思う。クラスの先生も、毎朝1番に教室にいる私に話しかけてくれたり、レベルが難しくないかなど気を配ってくれる優しい先生だった。

授業の内容は、文法、リスニング、ライティング、スピーキングをまんべんなく行っていた。文法の授業は、過去分詞など、暗記するものもあったが、日本のように毎回小テストをする訳ではなく、自分で勉強して覚えておくように、と言った感じで、学校では覚えたことを使って話したり聞いたり確認することに重点を置いていた気がする。私は、日本で勉強した時に、毎週の小テストでかなり覚えていたので、文法の授業の時はクラスの中で頼りにされた。先生も文法のことはよく褒めてくれた。ライティングの宿題なども、よく書けていると褒められることが多く、嬉しかった。リスニングは、私にとっては難しかった。スピードも速く、わからない単語が多かった。しかし、特にコロンビア人の学生は、かなり分かっているようで余裕だった。後から話を聞いていて知ったが、スペイン語とフランス語は単語や文法が似ており、話す、聞く面では彼らにとっては簡単だそうだった。スピーキングも、やはり苦手分野だった。よく、欧米の学生は発言が活発だと聞くが、本当にそうだった。思ったよりも多くの学生が発言していたわけではなかったが、特にスペ

イン語圏の学生はよく発言していた。発言、というより私には周りを気にせず先生と対話するように授業に参加している、といった印象だった。しかし、この研修の目標に、授業で発言することを挙げていたので私も頑張ってみた。授業に参加している、という気持ちを感じられてその達成感が嬉しかった。

他の学生より話すのが難しくて自信を無くしてしまいそうにもなったが、文法に関することで頼りにされたりすると、自分の得意な部分を再確認できて大きな自信に繋がった。お互いに、得意な部分、不得意な部分がそれぞれあるのだ、と思え、あとは聞く力と話す力だけだから頑張ろう、という決意にも繋がった。授業の合間に話しかけてくれる学生もいて、フランス語でお互いの国や前の日の出来事について話すことができ、嬉しかった。しかし、やっとお互いのことを知れるようになったところで1ヶ月が過ぎてしまった。自分がもっと話せるように成長するには短すぎる時間だったと思った。

生活面について、日曜日には多くの店が閉まっており、スーパーも早くに閉まってしまうので、日曜日には買い物があまりできなかったが、他の日はほとんど何か買い物をしていた。店員は、店に入ってこちらから挨拶する時もあれば、店に入るとすぐにボンジュール、マダムと声をかけてくれる店も多かった。日本のいらっしゃいませ、と違って、お互いの挨拶できちんと目を合わせるの、初めは緊張してしまった。しかし、店員と、お客との距離が近くなり、買い物の相談もしやすいし、フランスの、皆平等という精神がはっきり現れている文化なのだなと感じた。お客側も、平等だと思っているため日本によくあるクレームのように店員の態度について文句を言ったりもせず、対等に買い物が出来ることが素敵だと思った。

私は、今回現地の人と話す時はフランス語だけで頑張って話そうと決めていた。初めは挨拶くらいしか出来なかったが、店員が話しかけてくれた時に相談をしてみたり、質問をしてみたりと少しずつ挑戦してみた。そのような、日常生活をする上で必要な表現などは、以前授業で先生に紹介していただいた『パリが楽しくなる！かんたんフランス語』（桜井道子、荻野雅代）がとても役に立った。基本的な挨拶から、買い物をするとき、カフェやレストランに入った時、美術館に行った時など場面ごとに使える表現がたくさん載っていた。そこに書いてある表現を参考に、実際にその状況に合わせて使ってみて通じると、前よりもフランス語ができるようになったような気にもなり、何より表現を確実に身に付けることができた。実際に店員や美術館の職員の方と会話が少しでも成立した時の感動は本当に嬉しいものだった。

美術館や博物館には多く足を運んだ。リヨンだけでもたくさんあり、その中でも気になる所6館に訪れた。どこもそれぞれに特徴があり、見るのが楽しかった。日頃から美術館に行くのが好きで、大学では学芸員の資格過程を取っている私には、日本とは違う国で博物館をたくさん見ることができ、また刺激を受けることができて良かった。

食生活について、私は、特に大学に入るまでは外国の食べ物が食べられず、海外に行くのも怖くなってしまっていたが、フランスには絶対に行ってみたいという思いがあったので勇気を出してみた。実際に行ってみて、一切その心配はなかった。スーパーでも買い物をして自分で軽く調理をしたり、週末のマルシェで買った食材で料理を作ったりした。外食もほぼ全て食べることができた。ブーランジェリーで買うパンはもちろん、他の野菜やレストランの料理も美味しい、と思って食べることができ、大きな悩みだったことが克服

出来たことが本当に嬉しかった。日本と同じように、食にはこだわりを持っているように感じた。

寮では、他の学生と接する機会が少なかったが、1度だけ中国人の学生と話をした。その時は英語だったが、日本文化について話をした。私は大学で茶道をやっていたので、見せて欲しいと言われ道具を代理のもので揃えて披露した。とても喜んでくれたが、日本の文化を、自分のやっている茶道を通して海外の人に伝えることが出来たことが嬉しかった。体験してもらったが、日本人が初めてやる動きとは全く違うことをするので興味深かった。茶道は日本人だったからこそ発展したのかもしれないと思った。この経験を通して、国籍の違う人の日本への印象や考えを知ることができ、日本のことについて自分も考え知りたいと思った。

その他にも、学校主催のアクティビティでリヨンの近郊に行ったり、パリへ出かけたりと色々な経験ができた研修だった。自分が満足するまでの語学力を成長させるには短い期間となってしまったが、たくさんのものに触れ、たくさんの人と交流して今まで自分が知ることのできなかったことを知ることができた。これからもフランス語を学びたいというモチベーションにもつながる最高の旅になった。この経験が無駄にしないよう、日本でも、フランス語を使う機会を存分に使い、次回フランスを訪れた時にはさらに成長できているように努力したいと思う。